

を用いることで、特別な道具を必要とせず歯や下顎骨の立体像を様々な方向から観察することができた。また、我々が従来行っている三次元再構築法との組合せで、内部構造をも立体的に把握することが可能となった。

本構成システムでは、特別な道具を必要としないという利点はあるが、同時観察者数3人までであるのが現状である。そのため、自由でインタラクティブな立体表示に必要な高解像度・高速駒数可能な表示器の開発が期待される。

臨床および研究分野におけるプレゼンテーションの際、本システムを用いることでより理解しやすくなることが示唆された。

演題4. 基底膜の厚さと透明層中の構造物の各組織間での比較

○大澤 得二, 小野寺政雄, 馮 新顔
野坂洋一郎

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第一講座

目的：基底膜には、表皮基底膜、粘膜上皮基底膜のように厚く典型的な形態を示すもの他、筋細胞基底膜、シュワン細胞基底膜のように薄いものも存在する。後者の薄い基底膜群は同じ厚さと形態を示すのではなく、それぞれの組織に固有の厚さと形態を示すものと思われるが、厳密な計測と観察はなされていない。そこで表皮基底膜と口腔粘膜上皮基底膜を対照とし、種々の薄いタイプの基底膜の透明層と緻密層の厚さを計測し、さらに透明層中の構造物について比較した。

材料・方法：3か月齢ウイスター・ラット（雄）をネンブタール麻酔後、組織（下唇、顔面神経、咬筋、腹腔の脂肪組織）を摘出し、通方による透過型電子顕微鏡観察を行なった。×200,000のプリント上で各組織（表皮、口腔粘膜上皮、シュワン細胞、神経周膜、血管内皮、ペリサイト、脂肪細胞、筋細胞）の基底膜の透明層と緻密層の厚さを100箇所計測し、計測値はパーソナル・コンピュータを用いて統計処理を施した（StatView v.4.5 (ANOVA, Fisher's PLSD)）。

結果：薄いタイプの基底膜は有意差をもって厚いタイプの基底膜より薄いことが明らかとなった。その中で、シュワン細胞基底膜、神経周膜細胞基底膜、脂肪細胞基底膜の間では有意差はなく、筋細胞基底膜が今回の観察では最も薄い基底膜であることが明らかに

なった。表皮基底膜と粘膜上皮基底膜の透明層にはアンカリング・フィラメントと共に顆粒構造が見られた。

考察と結論：各組織は固有の厚さの基底膜（透明層、緻密層）を持つことが明らかとなった。透明層中の顆粒構造は膜貫通タンパクとラミニン5との結合を示すものかもしれない。細胞と基底膜との結合に関して、Roussele et al. (1997) の考え方だけでは基底膜の厚さの多様性を説明することはできないと思われる。

演題5. 予診室における窓口と電話での対応について

○木村 正, 中村弥栄子, 福田 容子
戸塚 盛雄, 梅原 照子*

岩手医科大学歯学部歯科予診室

岩手医科大学歯学部附属病院歯科衛生部*

目的：2002年10月から予診室受付窓口が正式に総合案内の業務を兼務することになった。そこで、今回我々は兼務開始前後における変化について、窓口対応と、電話対応の内容を臨床統計学的に検討した。

材料・方法：対象は、当科の窓口対応事例と電話対応のうち、2002年6月から2002年9月までと2002年10月を比較した。

結果・考察：窓口対応は2002年6月～9月が47例、10月が62例。電話対応は6月～9月が28例、10月が23例であった。窓口対応に要した時間は大部分が10分間以内であるが、長時間の例も認められた。窓口対応内容は、10月になってから「老人・障害者などの介助」と「業者・見舞客など」の問い合わせが増加していた。電話対応の内容は、診療時間・場所・手続きについての問い合わせが40%以上認められた。また、歯科医師の患者への治療後の注意や説明の不足により、窓口で対応している例が毎月何例か見られた。10月では対応困難な病状相談の比率が増加していた。

窓口対応と電話対応の双方で10月から件数が大幅に増加していた。これは、総合案内のディスプレイが行われ、相談者から見て、問い合わせ場所が明確化したことによると考えられる。